8 月 28 日のメッセージ

聖書：エフェソの信徒への手紙　4：　17 – 32

「新しい人」

「互いに認め合う」「互いに仕え合う」ことが大切だとわかっていながら、現実には区別、差別が蔓延しているのが私たちの社会です。自分を殺し、忖度しながら生きています。また、欲望のままに生きて何が悪いとうそぶく社会にあって、自分だけが損をしているのではないかと流されそうになっています。

手紙はそのような人に警鐘を鳴らします。「あなたがたは、キリストをこのように学んだのではありません。」(エフェソの信徒への手紙 4:20)

そのような社会であるならば、なお一層、神の救いを求めよ、といいます。神の助けなくして生きられない自分を再発見せよ、と(「心の底から新たにされて、神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません。」エフェソの信徒への手紙 4:23-24)。

ここで言う新しさとは、何か特別な生き方を指しているのではありません。神を忘れ、神から離れようとする「古い人」、自分勝手な生き方を捨てて、神に立ち帰ることを指しています。手紙はそれを「新しい人」と呼ぶのです。

「新しい人」=真に救いを求める者は、小賢しく救いを語ったりはしません。むしろ、自分には何もわかっていない、何も見えていないことを自覚し、神を、救い主を呼び求めるのです(「ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、『ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください』と言い始めた。」マルコによる福音書 10:47)。

神はその叫びを聞き逃されません(「イエスは立ち止まって、『あの男を呼んで来なさい』と言われた。……」マルコによる福音書 10:49)。自ら神から離れ、神など必要ないとまでうそぶく人間を、神は見捨てられません。それどころか、もう一度、鍛え直そうと向き合ってくださるのです。　本当に、「人間は何ものなのでしょう」(「そのあなたが御心に留めてくださるとは／人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう／あなたが顧みてくださるとは。」詩編 8:5)。私たちはここまで神が愛してくださる存在なのです。

そして、救いは確実に与えられます。「見えていない」と自覚する者は、すぐに目を開かれます(「そこで、イエスは言われた。『行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。』盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。」マルコによる福音書 10:52)。再び目を開いていただいたのならば、私たちには改めて神に従う道がはっきりと見えていることでしょう(「人よ、何が善であり／主が何をお前に求めておられるかは／お前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し／へりくだって神と共に歩むこと、これである。」ミカ書 6:8)。

しかし、一度、古い人を脱ぎ捨て、新しい人を着たからといって、それで終わりではありません。なぜなら、私たちすぐに新しいものを着古してしまうからです。

だから、何度も立ち帰ることが大切です。マニュアルのように、点数表のように、何ができているから大丈夫、何ができていないからダメというものではありません(エフェソの信徒への手紙 4:26-32)。

まずは自分の行いを神の前に吟味しましょう。他人を裁くのではありません。自分としっかり向き合い、改めて自分が救いの内に入れられていることに感謝したい。全ての存在が神に救われていることを改めて思います。

そして、一人ひとりが新しい人として、互いに仕え合う道を求めていきたいのです。